

第14回日本外来小児科学会年次集会 スペシャルインタレスト

2004.8.22

赤ちゃんの2000人に1人はインフルエンザ菌b型(Hib)髄膜炎に
なっています

— 外来診療のリスク評価からみたHibワクチン導入の必要性 —

外来診療での経口抗菌薬の投与状況と耐性菌
の分離状況

— 日本の現状, 海外の現状 —

抗菌薬適正使用ワーキンググループ

くさかり小児科 草刈 章 耳原総合病院小児科 武内 一

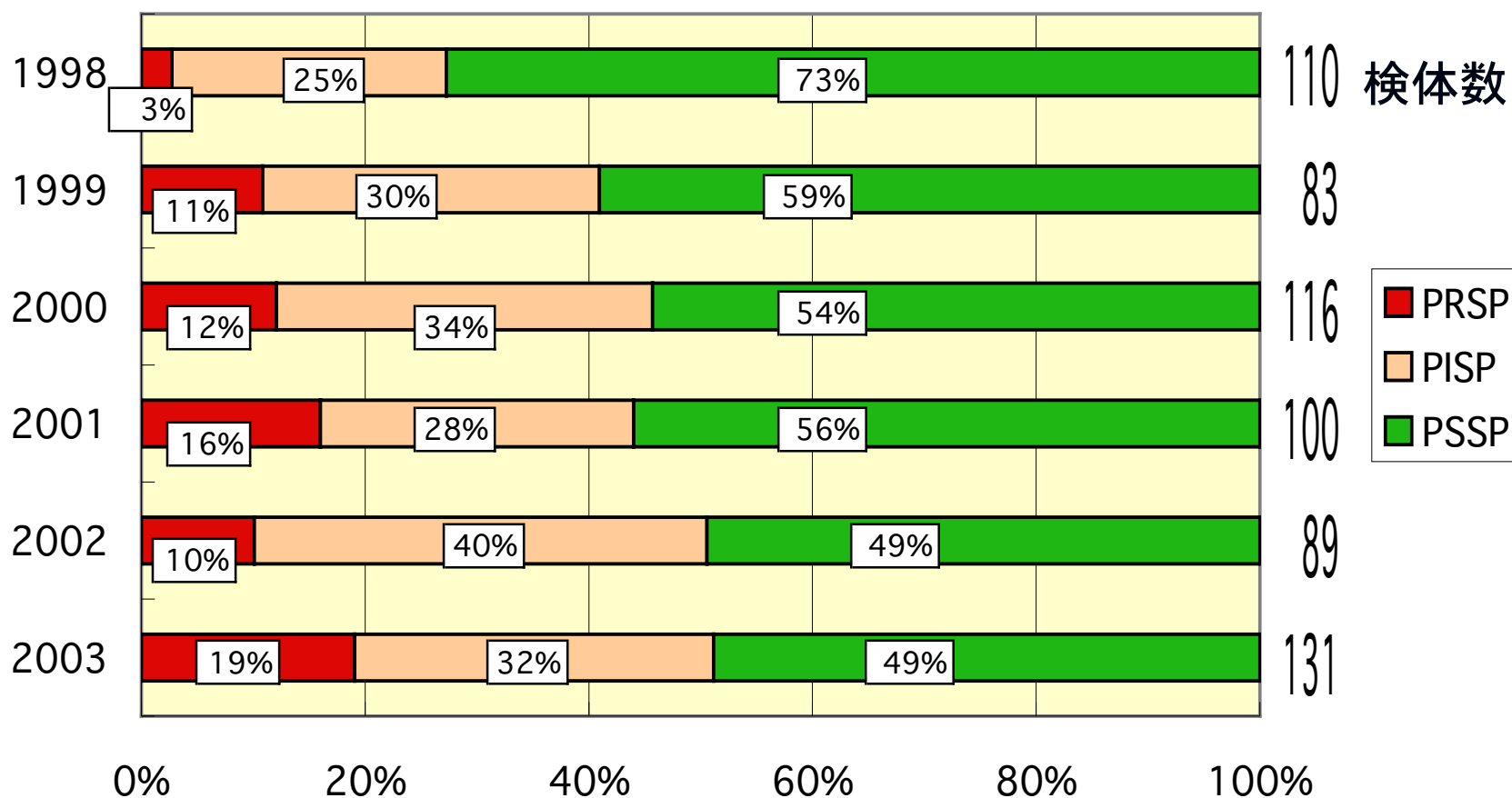
ふかざわ小児科 深澤 満 にしむら小児科 西村龍夫

よしだ小児科クリニック 吉田 均 他

市中感染症分離菌の薬剤感受性 1

Faropenemを含む各種抗菌薬に対する臨床分離株の薬剤感受性調査
島田甚五郎(聖マリアンナ医大)他、日本化学療法学会雑誌 51,680-692,2003

肺炎球菌:各年別耐性菌分離状況 全国382施設

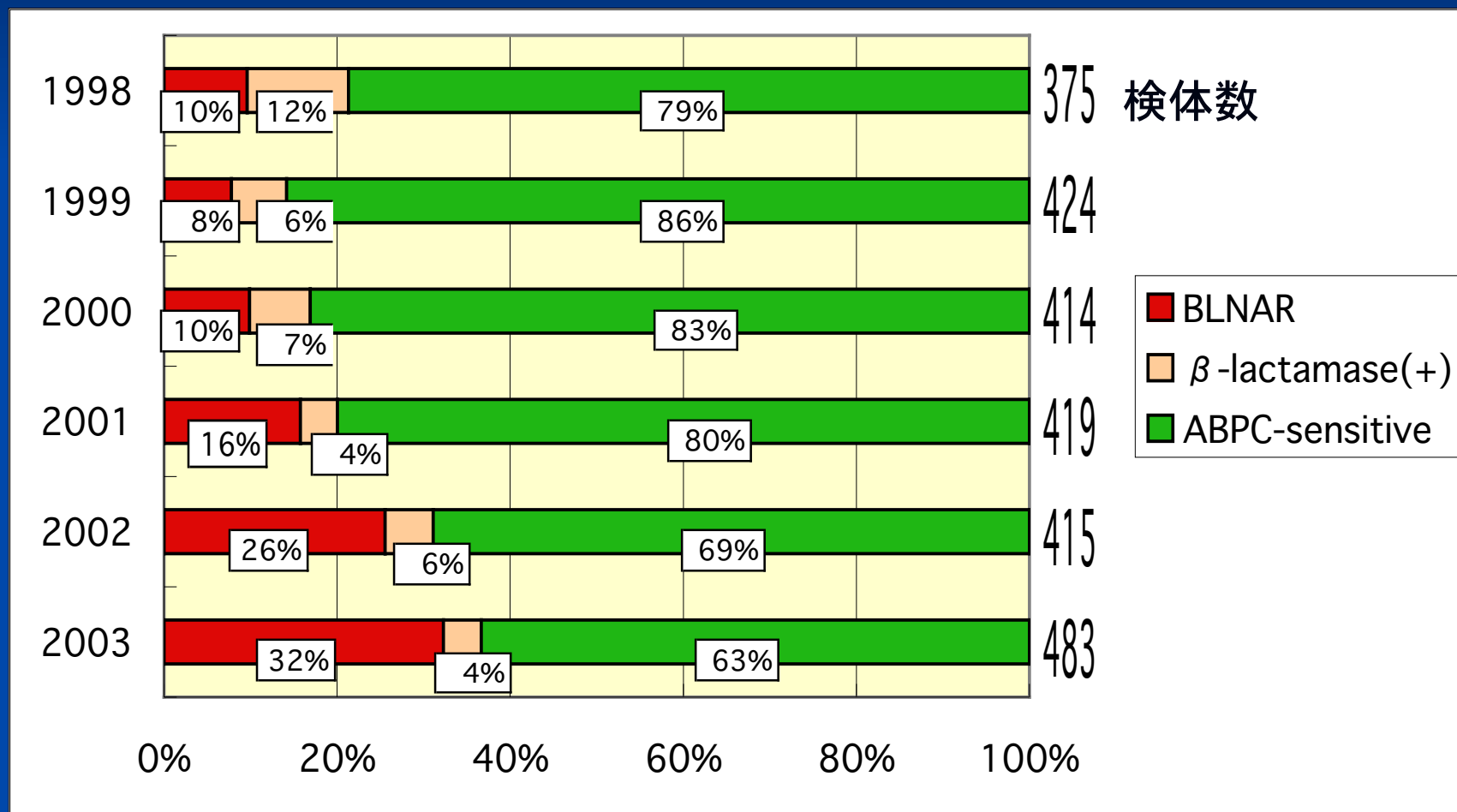


市中感染症分離菌の薬剤感受性 2

Faropenemを含む各種抗菌薬に対する臨床分離株の薬剤感受性調査

島田甚五郎 他、日本化学療法学会雑誌 51,680-692,2003

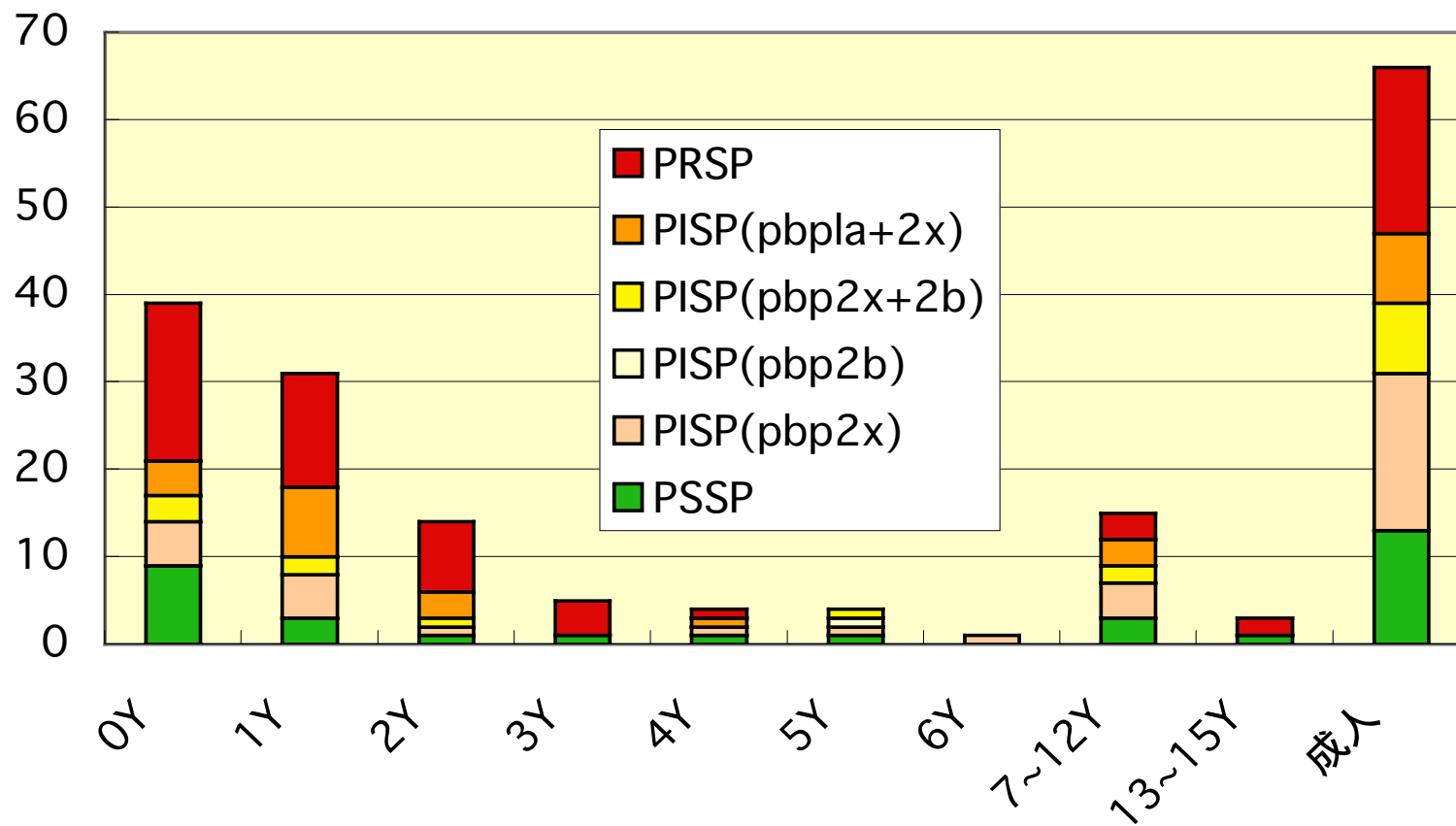
インフルエンザ菌:各年別耐性菌分離状況 全国382施設



化膿性髄膜炎・全国サーベイランス 1

速報 No.4 ー2年間のまとめー 代表者:砂川慶介(北里大学医学部感染症学講座)
共同研究者:岩田 敏(国立病院東京医療センター) 生方公子(北里大学・北里生命科学研究所)

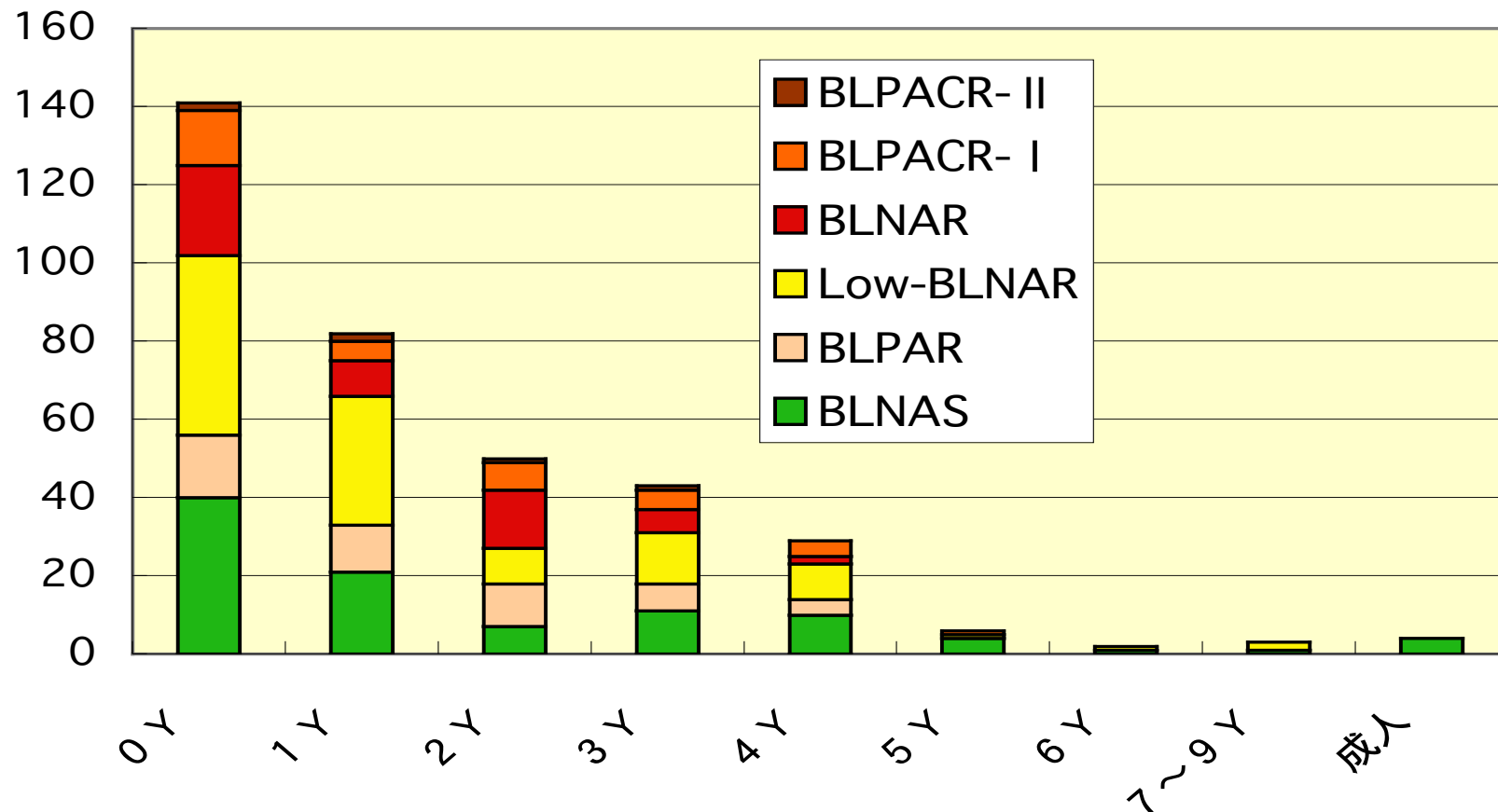
肺炎球菌、症例の年齢分布と分離菌の耐性化状況 (n=182)



化膿性髄膜炎・全国サーベイランス 2

速報 No.4 ―2年間のまとめ― 代表者:砂川慶介(北里大学医学部感染症学講座)
共同研究者:岩田 敏(国立病院東京医療センター) 生方公子(北里大学・北里生命科学研究所)

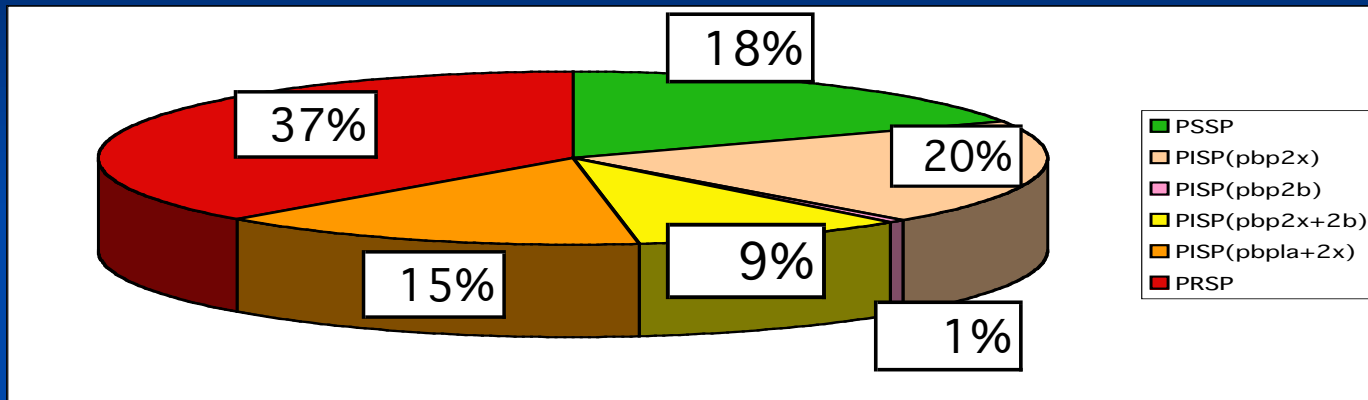
インフルエンザ菌、症例の年齢分布と分離菌の耐性化状況 (n=360)



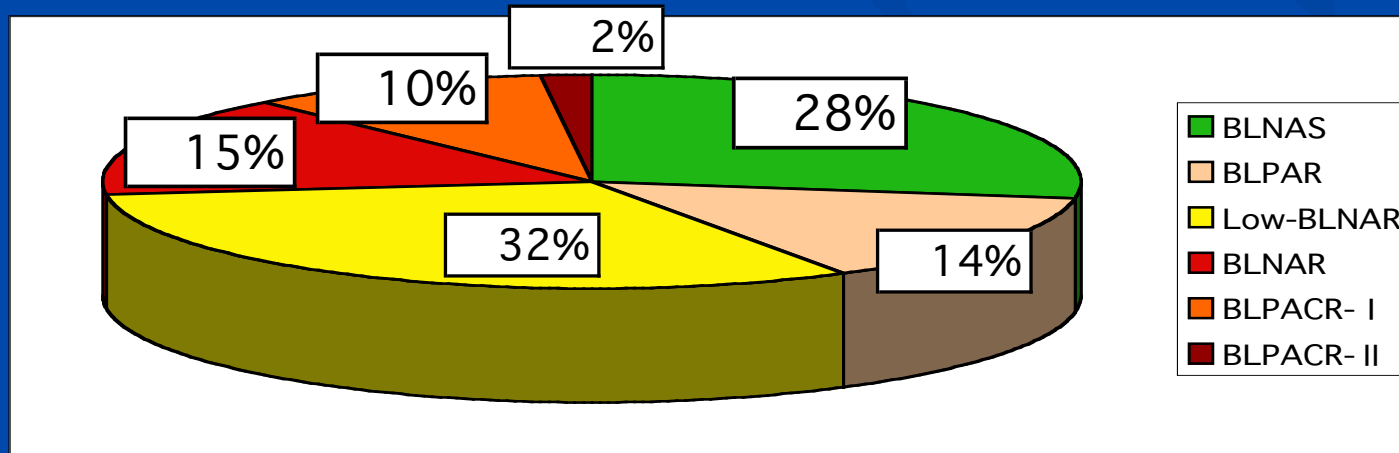
化膿性髄膜炎・全国サーベイランス 3

速報 No.4 ー2年間のまとめー 代表者:砂川慶介(北里大学医学部感染症学講座)
共同研究者:岩田 敏(国立病院東京医療センター) 生方公子(北里大学・北里生命科学研究所)

肺炎球菌 耐性菌、感受性菌の比率 n=182



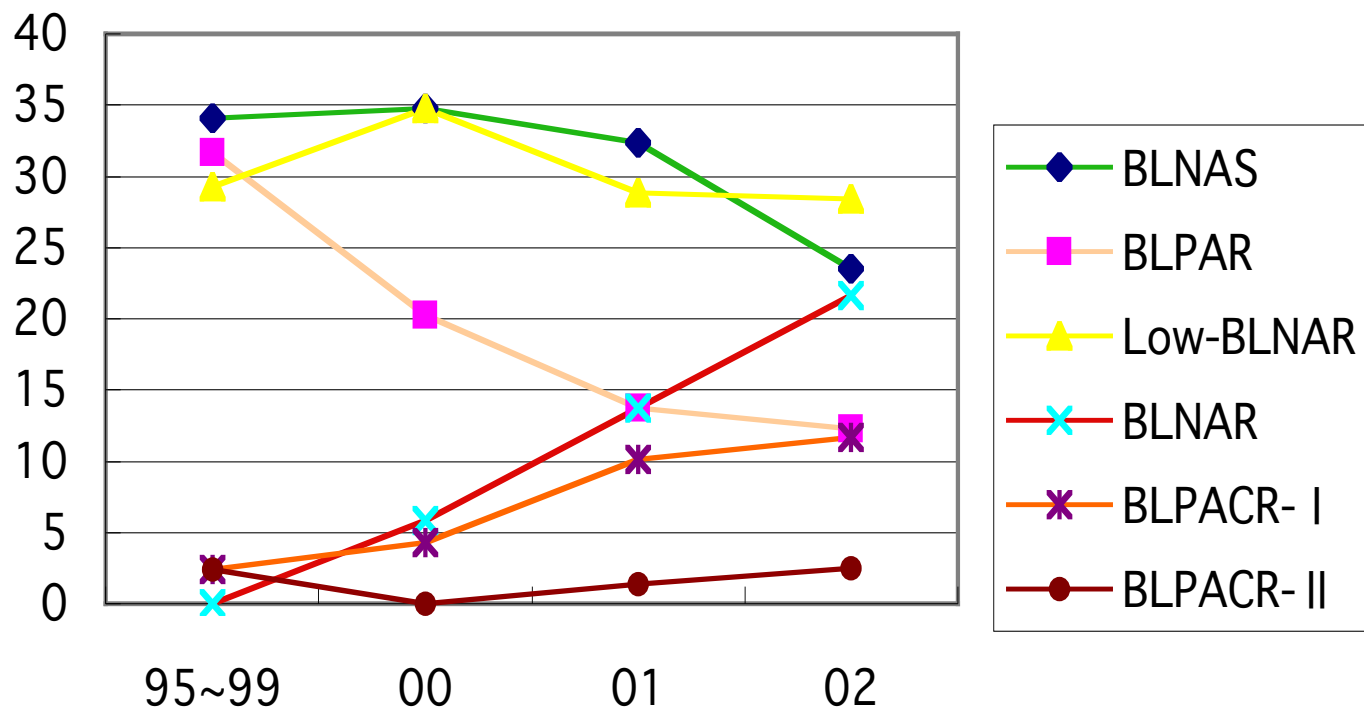
インフルエンザ菌 耐性菌、感受性菌の比率 n=360



化膿性髄膜炎・全国サーベイランス 4

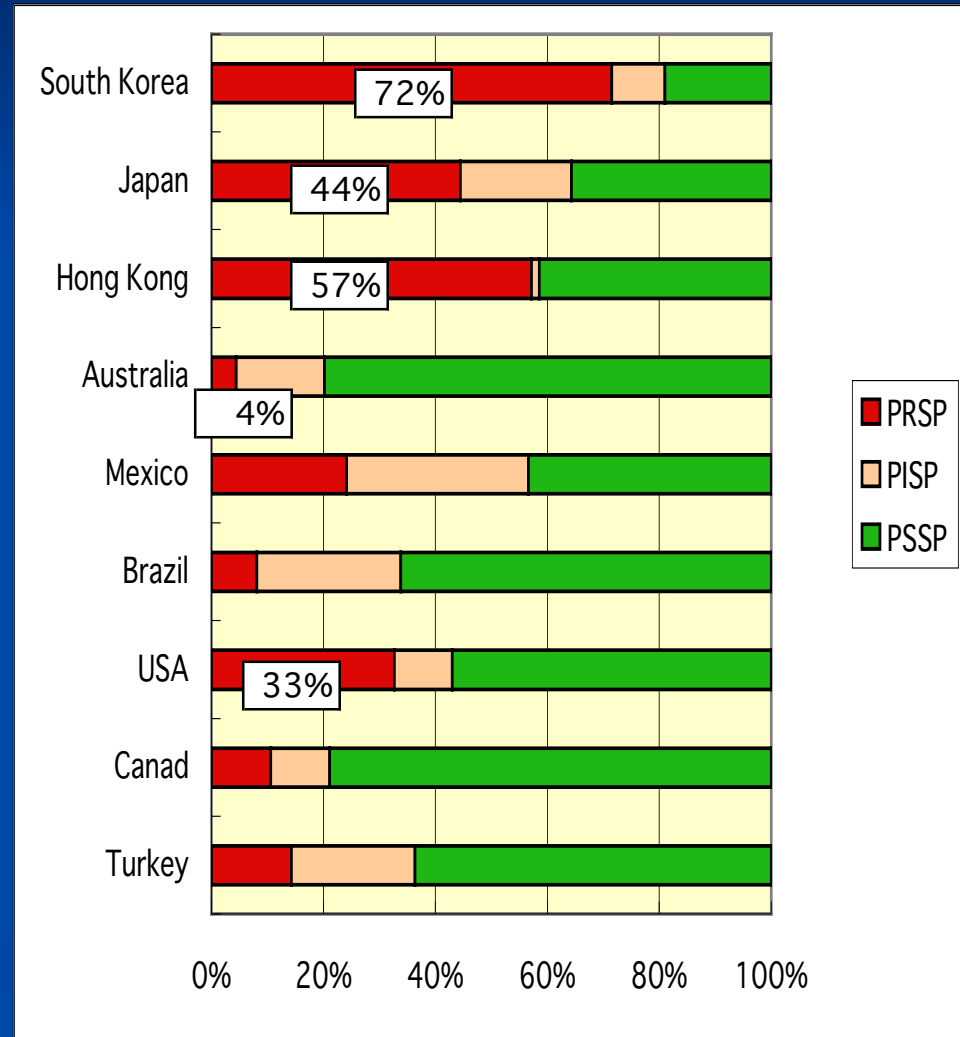
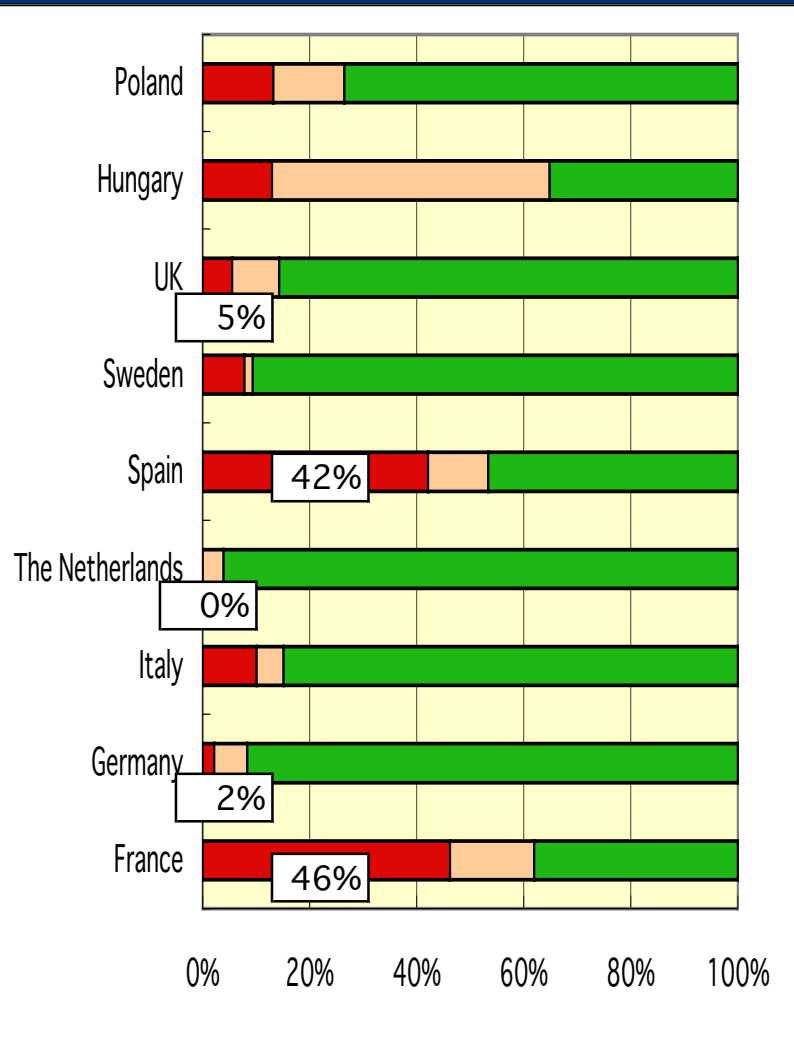
速報 No.4 ー2年間のまとめー 代表者:砂川慶介(北里大学医学部感染症学講座)
共同研究者:岩田 敏(国立病院東京医療センター) 生方公子(北里大学・北里生命科学研究所)

インフルエンザ菌の年次的耐性化動向



各国における肺炎球菌のPenicillinGに対する感受性状況

Felmingham,D et al;Increasing prevalence of antimicrobial resistance among isolates of St.pneum. ...
J of Antimicrobial Chemotherapy 2002; 50,25-37

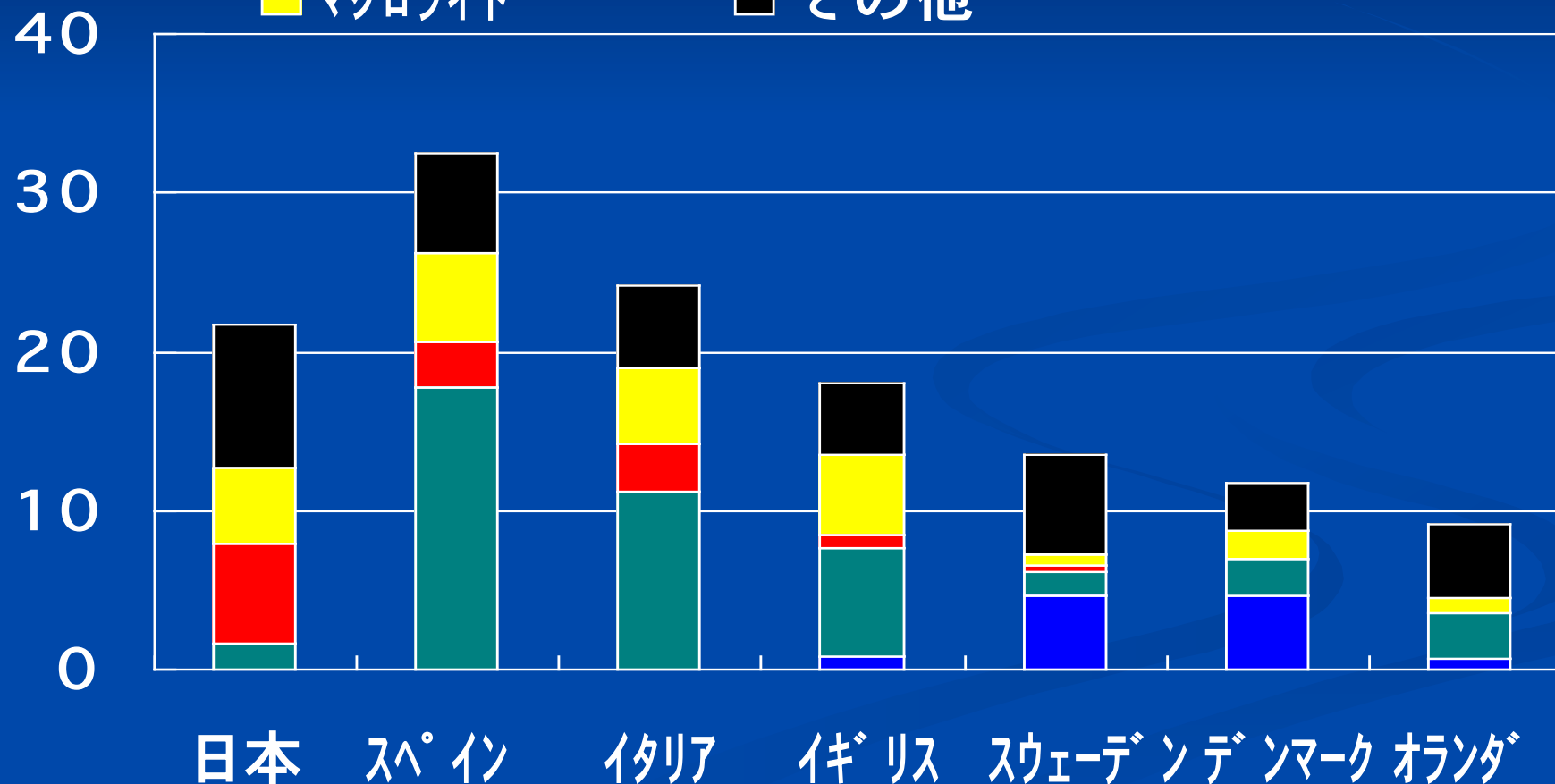


ペニシリン耐性肺炎球菌 (PNSP) 2001年の分離状況 日本は1999年Alexander Projectデータ



ヨーロッパ各国での外来での抗菌薬使用 1,000住民あたりの一日使用量

■ 狭域ペニシリン ■ 広域ペニシリン ■ セフェム
■ マクロライド ■ その他



小児科外来の抗菌薬使用調査

草刈 章 武内 一 芳賀恵一 泉谷徳男 下村国寿 深澤 満

第106回日本小児科学会総合シンポジウム「耐性菌時代における抗菌薬適正使用」

- **対象:** 日本外来小児科学会会員1518名の無作為に抽出した506名(33%)
- **調査項目:** 医療機関の所在地、年代、抗生物質処方理由、ガイドラインの必要性、上気道炎患者の診療内容
- **対象患者:** 15歳以下、発病72時間以内の初診、発熱($>37.5^{\circ}\text{C}$)鼻汁、咳、咽頭痛の一つ以上、連続した20人 平成14年10月21~26日 任意の1、2日間
- **調査項目:** 性、年齢、症状の有無、処方抗生物質の有無と薬品名

回答数と回答者プロフィール

回収数 159 31%

地域別回答数

北海道	6	4%
東北	10	6%
関東	34	22%
中部	27	17%
近畿	25	16%
中国四国	20	13%
九州	35	22%

就業医療機関

診療所 136 87%

市中病院 19 12%

有効回答数 157

年代別回答数

20代	1	1%
30代	10	6%
40代	61	39%
50代	61	39%
60代	18	11%
70代以上	5	3%
不明	1	1%

小児病院 1 1%

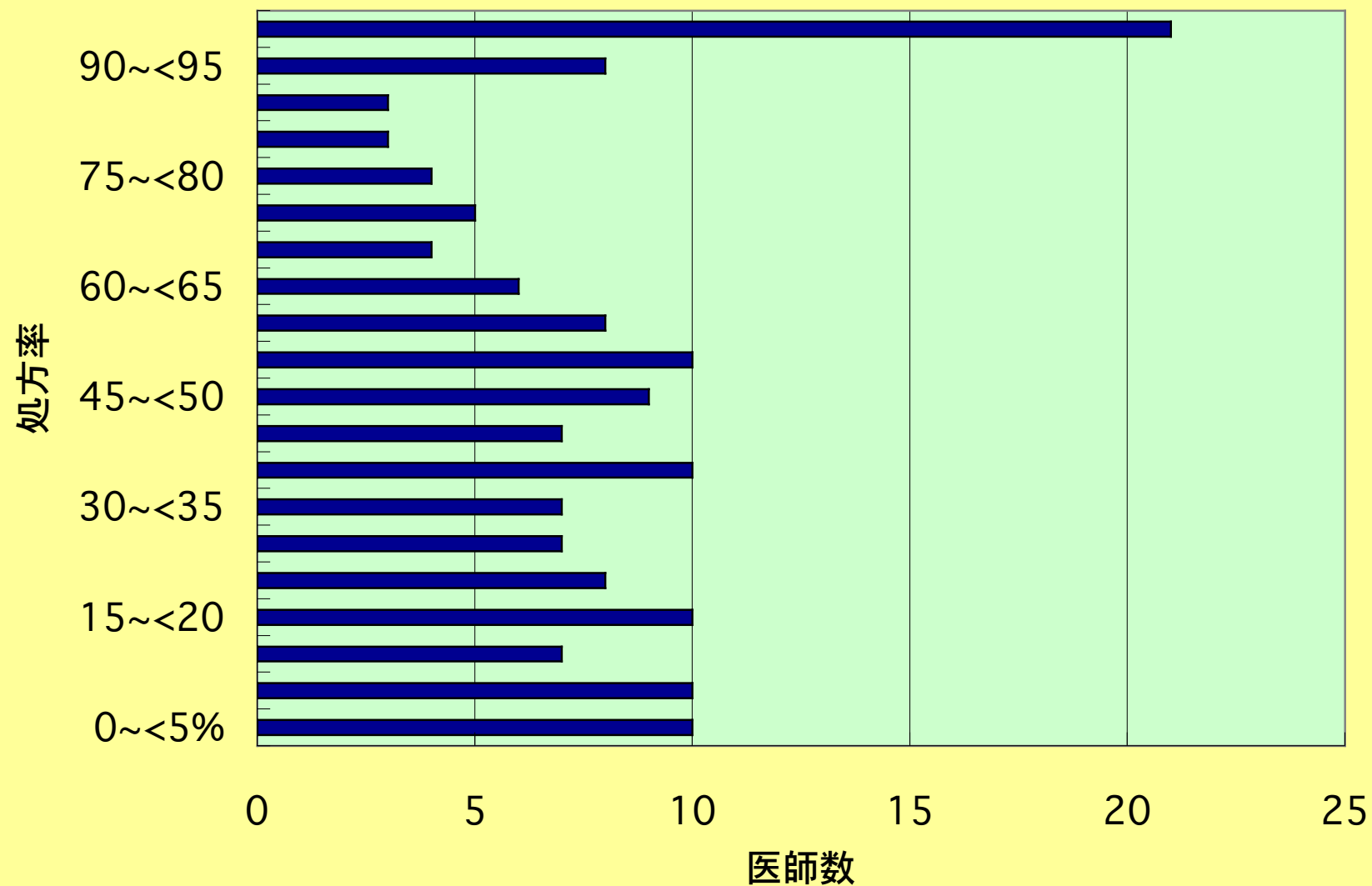
大学病院 1 1%

報告された上気道炎患者

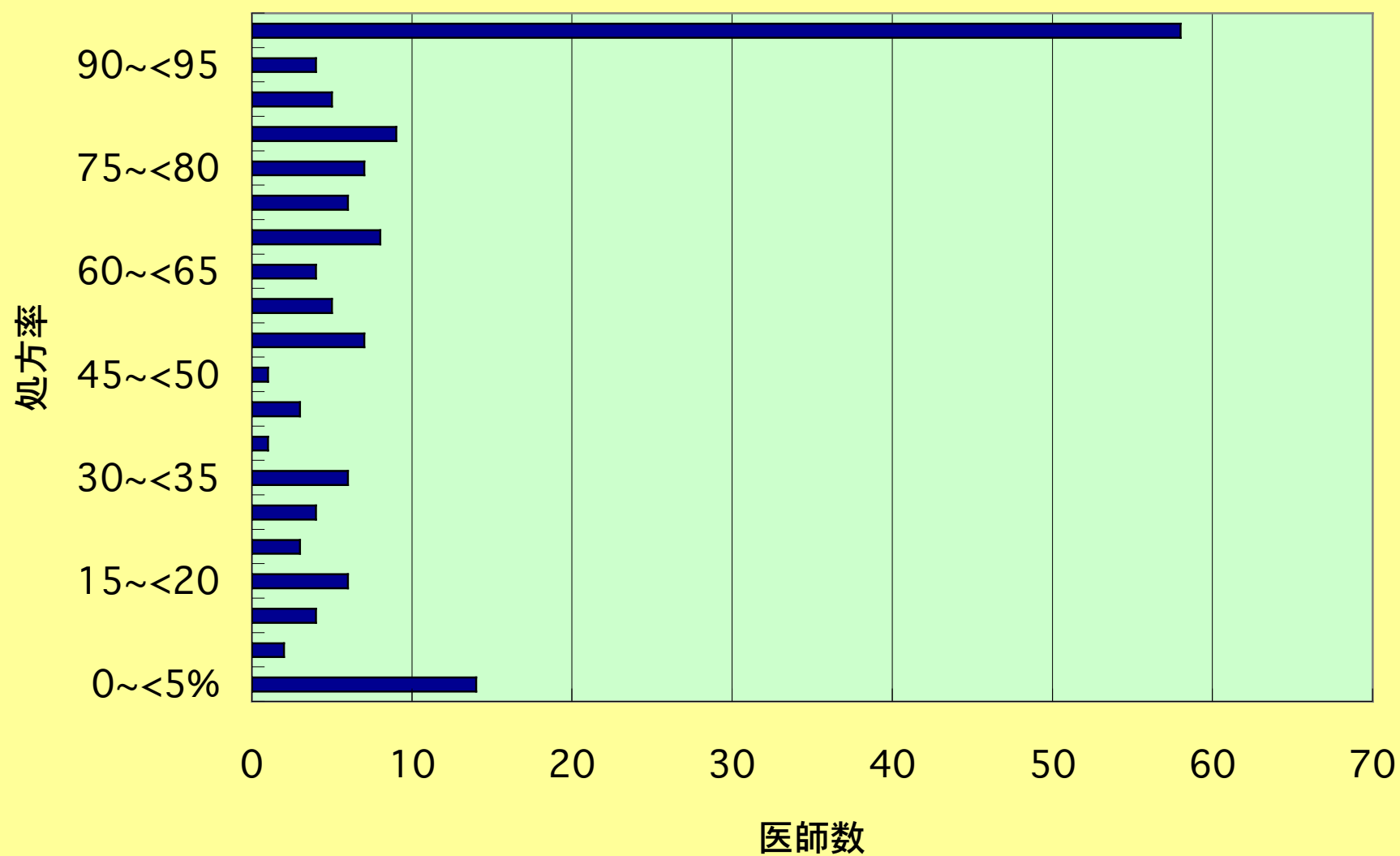
患者数	3055	0歳	14%
男	1515	1～2歳	33%
女	1419	3～5歳	32%
記載なし	121	6～9歳	15%
男:女=1:0.94		10～15歳	7%

抗生物質投与患者数 1443 47%

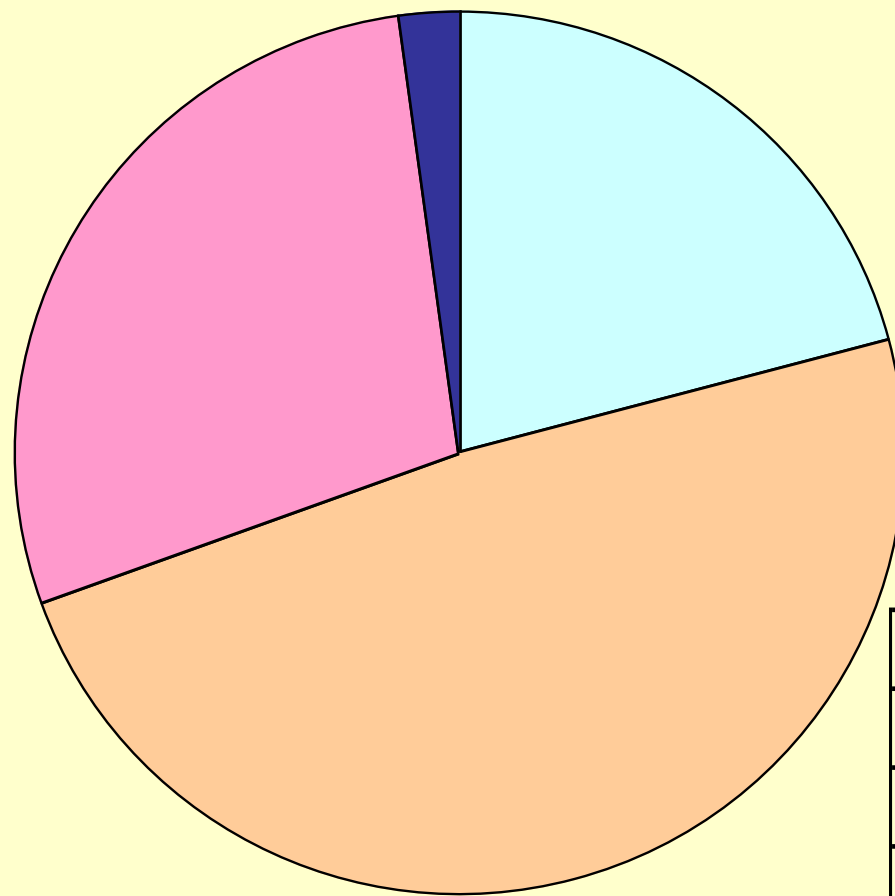
抗生物質処方率のヒストグラム(全患者)



抗生物質処方率のヒストグラム(発熱患者)



系統別抗菌薬使用割合



- ペニシリン系
- セフェム系
- マクロライド系
- その他

ペニシリン系	302	20.8%
セフェム系	703	48.5%
マクロライド系	412	28.4%
その他	32	2.2%

まとめ

- 本邦において、上気道炎、尿路感染症の起炎菌における耐性菌の割合は年々増加している。
- 重症感染症(髄膜炎)においても耐性菌の割合は増加している。
- 国際的にも本邦は有数の耐性菌蔓延国である。
- 耐性菌の増加は不適切な抗菌薬の使い方が原因になっていると思われる。